「子供たちの未来づくり」⑤
― 全国学力テストが意味するもの

「全国学力テスト」というテストがある。これは、小6と中3を対象に、毎年4月に実施され、科目は算数（数学）と国語の2科目のみである。全国一斉のテストはここ50年近く行われていなかったが2007年から再開された。再開された理由は詳しくはわからない。だが、この「全国学力テスト」の結果が出ると、いつもメディアではこぞって「学校毎に公表するか、しないか」だけが大きく取り沙汰される。しかし、それは決して本質的なことではないのではないか、といつも感じていた。

このテストによってもたらされた最も本質的な変化は、従来の「基礎基本」的な知識を問う問題を「A問題」として残す一方で、これに加えて「応用・活用」の力を問う問題を「B問題」として新設したことだろう。「B問題」には、過去に見られたことのないような設問が並んでいる。この時から、小中学校の先生たちには新しい挑戦が始まったと言われている。教科書に書かれている知識を暗記させ、理解させるだけではなく、さらに考える力を身に付けさせる。そのための「授業改善」への挑戦が今も続いている。

ところが！

である。大学入試は、これまでと何の変りもなく知識を問う、偏差値1点刻みのペーパテストだ。だから、高校に入学した途端、そんな「考える力」など悠長なことはかなぐり捨てて、ひたすら基礎・基本と暗記をたたき込む教育に変わってしまうのだそうだ。

今回の大学入試改革はここを変えることをねらっている。ということは、間違いなく高校教育が変わる。つまり、小中学校で挑戦されている「考える力」を身に付けさせる教育が、そのまま高校に、さらに大学にそして社会にまで一貫して続くことになる。

これまでの小中学校での取組みは正しかった。さらに実を上げる努力が求められている、ということになると思う。

文／日向市キャリア教育支援センター長
水永　正憲